慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	岩波講座 現代思想 別巻 歴史・ 人間・ 思想
Sub Title	
Author	寺尾, 誠
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1958
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.51, No.4 (1958. 4) ,p.365(81)- 368(84)
JaLC DOI	10.14991/001.19580401-0081
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19580401-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ユダヤ学僧の子として生まれ、メッテルニッヒ主義の影響とカソリック教会の圧力のもとに、著しく非生産的であったオーストリヤの社会科学（経済学的に言えば限界効用学派の登場以前）、哲学、思想の世界に成長し、その哲学的関心にも拘わらず、その資力の不足と反セミ的雰意気から哲学的研究の断念の下に、法律学に向い、公法の専門家としてウィーンの私講師、員外教授となり、ここで反セミ主義的勢力下にあった政府の圧迫に抗し、祖国に背を向けベルリン大学で教授資格をとり、バアーゼルに招かれ、そこで孤独なJ・ブルックハルトの影響をうけ、まもなくマックス・ウェーバーにめぐり合うことになるハイデルベルク大学に移り、公法、一般国家論、社会政治論史を講じた。

当時のウイルヘルム的ドイツの学問的雰意気は、哲学ではヘーゲル主義、シェリング主義の崩壊の後で、新カント派の批判主義は未だ芽生えのうちにあり、俗流マルクシズムが広く流布し、歴史学はランケ的、或はトライチケ的な政治史であり、経済学、社会科学は歴史、社会政策を志向し、法律学はロマン主義的歴史法学、法実証主義乃至はとりわけ刑法学がそうであったがヘーゲル、シェリング先験哲学の残滓下にあえいでいた。この雰意気下に、ハイデルベルク大学の特長は、自由―聖書批判的プロテスタンティズム、自由―立憲的国家法、反伝統主義的刑法学、新カント的認識論、歴史哲学であり、政治的、人種的理由による亡命外国人の集りであった。M・ウエーバー家やG・イエリネクのゼミナールはかかる亡命者の巣でもあった。

認識論上のG・イエリネクの基本的立場は所謂知識のカント的限定であり、有機体論的メカニズム、唯物論的、ダーヴィニズム的社会観、国家観の拒否、法律学的考察様式の純化への努力であり、かかる認識論上の立場に対応して、社会学的歴史家として、歴史認識の多面性の強調、唯一決定的な動因による歴史決定論の拒絶、普遍的一般法則中への個性的なるものの強制的押込めへの反対、ヘーゲル的、ギールケ的な、理念の歴史流出論や、ロッシャー等の「民族精神」的有機体のローマン主義観の排撃につとめ、他方党派、議会、国家結合等の法律学的観察より社会学的観察の重視、然し、集団を構成員の単なる合計にすぎないという名目主義の立場からは離れ、それ故国家を神秘的にみなくとも、それを自然法理論の如くに個人の単なる集合体となすこともなく、人格性と主体的公権をもつ法人格的国家共同体の肯定のもとに、国際間にいたるまでの確固たる法秩序の、将来の実現化の希望をもって一般国家論を構成した。しかし社会的歴史家としての彼の重大な貢献は、マックス・ウェーバーも亦指摘するように、カルヴィニズムからニュー・イングラント植民地、アメリカ個別国家制度を越えフランス大革命憲法につながる連続性の観察者として、トレルチ、マックス・ウェーバーに対するその先駆的位置であった。

三

右にみたように理論面において、若干の異質性があるとは言え極めて親近性を示したG・イエリネクとマックス・ウェーバーの人間像上の関係はどうであろうか。前者のウィーン的、モオツァルト的な響きに、後者の学問上の厳格主義的抽象性、講演における旧約聖書的予言の響きが対応する。両者は政治方向においては共に国民自由党のうちに出発したが、重工業プロシャ派ではなく社会政策的左翼バーデン派であった。だがM・ウェーバーが一八九〇年来、ウイルヘルム的統治の破局性に対しカッサンドラの叫びを持続した、あの悲劇性はG・イエリネクにみられない。彼の祖国オーストリヤに対しては、ウイルヘルム・ドイツはむしろ安住の地だったのである。宗教的倫理的領域では、彼らは共に新カント主義的出発点から、宗教的自律性、自主的哲学思索の立場に基づき、良心と科学の自由の抑圧をもたらす限りにおいて教会的権威に闘った。即ち知的誠実性を尊重し、又既述の如く、科学と宗教、政治のカント的限定に耐えた。勿論マックス・ウェーバーはオッカム、名目主義的フランチスカ派、カント、A・ランゲ、更にハイデルベルク社会学にいたる名目主義的要因の強調、二律背反的構成をもつ世界の調和の欠如の強調というつながりの最後の環として、G・イエリネクの遙か先を歩むにいたったが。たとえばカントの実践理性批判はむしろ人間的英雄性のマックス・ウェーバー的苦闘の先ぶれにすぎないのである。その点においてまさしく、近代西洋の政治的世界のうちに、個人の主観的な公権的権利の保証を認めることにより安定し得た、G・イエリネクのゲーテ的性格に対し、政治的世界と山上の説教の受忍の倫理の間にひそむ免かれがたき非劇的矛盾性に、真正面から対決したM・ウェーバーのドストエフスキー的面貌が相対する。とはいえ、かくて確固たる法秩序の将来の実現化の希望のうちに一般国家論の体系化をしとげ、夫人にゲーテの西東詩集を読みつつ世を去ったG・イエリネクは、ドストエフスキー的マックス・ウェーバーの生涯から無視し得ないこと、それは丁度G・イエリネク自身が社会に関する近代思想の歴史から無視され得ないのと同じである。

（石坂　巌）

岩波講座　現代思想　別巻

『歴史・人間・思想』

この講座は現代の思想的状況を分析し、現実とこれらの思想の対決を求め、思想の有効性を回復することを目的としている。この別巻では特に激動じつつある世界の各地で現実と取り組みつつ思索する東西の思想家の諸論文が十四篇おさめられている。その論者はハンガリーのルカーチやソ聯のエレンブルグを始め、西欧のレヴィット、バルト、ボーヴォワール、ニーダム、リード、米国のフロム、サマヴィル、スウィージー、マンフォード、オーストラリアのボール、アジアの唯一の代表者ラダクリシュナンである。これらの諸論文はテーマも内容も夫々の人々の専門や関心により多様であり、個性的な風格を備えている。従ってそこから何か統一した結論を引き出すことは出来ないし、世界の思想家の全傾向が理解出来るといった期

待も持てない。殊に社会主義陣営の投稿が二つしかなく、しかも西欧の論者のテーマと直接嚙み合う者が少なく、アジア・アフリカ諸国からもたった一人の思想家しか名を連ねていないことは残念である。しかし西欧やアメリカの良識ある思想家達が二十世紀の半ばを過ぎた今、人類の現在と将来につき如何に考えているかを知るには好論文が多いといえよう。以下このような観点で各論文の底にひそむ論者の問題意識を探ってみたい。そしてそこには或る程度共通の歴史的意識が存在するといえるのではないだろうか。レヴイットは「最近の両世界戦争のおかげで、歴史がまず第一に経済史や社会史や文化史でもなければ、もちろん精神史でもなく、政治的な意味における世界史だということがふたたび明らかになった」とのべ西欧の没落から人類の破滅の危険に注目しつつも全体として抽象的に「現代史とは人がそれを頼りとし、その生活の進路を定めるよすがとすべき何物でもない」と結んでいる（「人間と歴史」四、七、三〇頁）。米国の心理学者フロムは生産の巨大な発展と人類の壮大な夢の実現を約束したかにみえた近代社会において今日「人類の頭上には一切を破壊し尽す戦争の危険が懸っていて、この危険は目下流行のジュネーブ精神などでは到底乗り切れるものではない」とのべ、一切が市場を通して評価される現代社会においては人間は「自動人間であり疎外された人間」となってしまう（「現代における人間の条件」三七、八頁）。そしてこのような疎外こそ原子戦争をひき起し、人類を破滅に導くものだとする。そして戦争やロボット生活の道ではなく、「人間と人間が愛によって結ばれる社会」を創造することによって人間の歴史に新しい時期が訪れることになるとしている（四四頁）。このような西欧世界における人間の疎外をボーヴォワールはブルジョア社会の右翼思想を対象として鋭く分析している。そしてその唯我主義と内面生活への後退を批判し、このような西欧のエリートは「周囲にみちみちている〈饑餓と貧困と野蛮〉の鼻先で、平然と自分の庭を耕し続けることが出来るのだ」という（「選ばれた人々の生活」五四―五七、六七―九頁）。米国のマンフォードは「われわれは、われわれ自身創り出した機械装置のいわば歯車にしかすぎないものに成り下ってしまった」と指摘し「このような世界にあっては、都市百万人の人間を水爆によって、まるでゴミ捨て場のネズミ同様に屠殺してしまうことくらい、すぐ考えつくに相違ない」（「プロスペロの復権」一五八頁）。かくして自我を克服し宗教的な上位自我の確立により人間性を回復することに救いを求めている。と同時に西欧指導者の不思議な自己満足感を攻撃し、「コカコラをもってマルクシズムに対抗することはできない」とする（一五六、一八二頁）。また神学者バルトも大衆化の傾向に抗して個人の主体性を確立することを訴えている（「現代における個人」三一―三五頁）。同じ西欧の自然科学者バナールは世界諸国民の切実な世界戦争への恐怖に注目しこの戦争を防止し恒久平和をうちたてることが近来西欧知識人の関心となりつつあることを指摘し、社会主義諸国での大建設計画等による科学の成果の大巾の利用と共に、アジア・

アフリカ諸国民の「どんな民族も自己の自由を獲得できさえすれば、あらたに自己自身の未来をつくりだす能力をそなえているという自覚」に注目する（「科学と文化」一〇三頁）。そして人間は最早受身でたえしのぶ必要はなく、意識的に科学を人間の幸福の為に用いる決意をすべきだとのべ、その意味で社会主義こそ人類に壮大な将来を約束するものだとしている。米国の社会科学者スウィージーは「緊張の緩和と自由化」が社会主義諸国の発展により実現し、「いまでさえ可能性を減じつつある第三次大戦がますます防止される」とし、多様な形態を認めつつも社会主義社会の優位性が平和共存の下で証明されて行くとする（「マルクス主義の将来」一〇〇頁）。同じマルクス主義の立場に立つルカーチは「思想的自伝」の中でスターリン主義は一九四八年の中国革命成功により世界に起った変化を見とおせず旧い戦略戦術を固執し、西欧指導者の力の政策にまきこまれ、冷い戦争の危機を造り出したとし、マルクス主義は謙虚になると共に、大きな期待をもって創造活動に取り組むべきであるとしている（二六〇―二六六頁）。西欧の論者で注目すべきものにはさらに英国の生化学者ニーダムがいる。彼はいわゆるヨーロッパ的見地に痛烈な批判を加え「われわれはどうしてもヨーロッパを外部から見なければならず、ヨーロッパの歴史とヨーロッパの失敗ならびにヨーロッパの成果とを人類の大きな部分すなわちアジア（さらにまたアフリカ）の人民の眼を通じて見なければならない」と主張する（「ヨーロッパとアジアとの対話」一二二頁）。そしてこの西欧的偏見が実はアジア・アフリカへの無知に基いているものであることを鋭く指摘し、その訂正を要求し、中国の法観念、官僚主義の運用等に注目しつつ、「謙虚さと友愛との積極的な実践」を通し、ヨーロッパの文明の成果を人類の共有財産とすると共に、アジア・アフリカからも進んで学ぶことを西欧の同胞に訴えている。またボールは第二次大戦後植民地主義の時代が過去となり、全面戦争が人類の破滅の可能性を増している為西欧の東アジア軍事政策は大きな困難に直面している（「東アジアにおける共産主義と植民地主義」一四七―九頁）。さらに共産主義の脅威が軍事的な脅威でなくなり「共産主義指導者達は、今では戦争というものは政策のための手段として、あまりにも危険であり、あるいはあまりに不経済であるから、それは不必要だと思っているようである。」（一五一頁）そして中立政策の承認、軍事政策優位の訂正、中国の承認を提案している。インドのラダクリシュナンは新興のアジア・アフリカ人民のヴィジョンを語り、歴史的決定論に反対し、「われわれは運命のおもちゃではないのです」（「議会制民主主義」二三八頁）という。そして民主主義の発展を「説得と同意の方法による社会的経済的革命」の達成により保証し、世界の経済的財貨の再分配の行われる人類社会の創造を見とおしている（二四四―二四七頁）。なおこの他にリードの「マス・プロダクション時代の芸術」とエレンブルグの「印象派の画家」の二論文があり、共に夫々興味ある内容を持つが、ここでは直接関りのないものなのでふれない。

さて以上簡単に指摘した多くの論者の歴史的意識は二十世紀前半から後半に向い流れつつある巨大な世界史の潮流と密接な関係を持つ。西欧の多くの思想家が全面的戦争の危険に注目し、この危険からの脱出を夫々の立場からのべていることはこの関連を示している。しかもフロム、マンフォードのようにこの危機を近代社会の人間疎外との関連でとらえ、抽象的ではあるが新しい人間変革＝社会変革にその解決を求める者もいる。殊にサマヴィル、スウィージー、バナール、ニーダム、ボール、マンフォード等が西欧資本主義諸国の指導者の力の政策にこの危機の具体的な根源があることを指摘し、軍事政策優位から平和共存と相互理解の政策への転換を期待していることは、バナールのいう西欧知識人の良識を示しているといえよう。しかもこのような良識は単に社会主義体制との共存丈ではなく、新しく世界史の舞台に登場したアジア・アフリカ諸国民への偏見を訂正することをも求めるところに世界史的な意義がある。第二次大戦以後世界史は複雑さを増すと共に、それ以前にはみられぬ新しい様相を示し始め、この傾向は今後の世界史の筋道を示しているといえよう。二十世紀前半に二つの世界大戦が資本主義諸国の政治的経済的対立からうまれたことは周知の事実である。このような二つの世界的戦争、殊に第二次大戦の結果世界史の舞台には先進資本主義諸国以外に社会主義諸国、旧植民地のアジア・アフリカ諸国が登場した。もちろんこのような過程殊にアジア・アフリカの独立の傾向は今なお進行しつつある。そして戦後現在迄の戦争の危機も資本主義諸国間の対立からでなく、いわゆる冷戦といわれる社会主義諸国と資本主義諸国の対立、資本主義諸国と旧植民地諸国との対立からひき起されてきたものであることは明らかであろう。しかもアジア・アフリカ諸国民の平和、中立勢力としての発言と、ここ数年来積極的になった社会主義諸国の平和共存の政策は、このような西欧資本主義諸国との対立から戦争がうまれる可能性を減じつつある。にも拘らず現在西欧の多くの思想家の指摘する戦争の危機が人類の将来に影をさしているのは主に西欧資本主義諸国の旧来の力の政策への固執によるものであろう。西欧の多くの論者が夫々の立場から、この点に世界史の現在における問題点を求めていることは注目してよい。そしてこのような歴史的認識は今後諸国民の平和希求の世論の高揚と共に益々深まるであろう。しかもアジアのラダクリシュナンやハンガリーのルカーチのような世界史に新しく登場した諸国の代表的思想家に、西欧の思想家にみられる人間の疎外化の呟きがなく、歴史の未来に希望をかけていることも興味深い。平和共存という新しい事態の下で、果して西欧社会がどのような変化を遂げるに到るかは今後の世界史の大きな課題であろう。それがバナール、スウィージーのいうような社会主義の方向への変革となるか否かは今後の歴史の推移によって明らかとなるであろう。ともかく西欧社会が新しい世界史の一頁では新しい変化を要求されるようになることは、多くの論者も指摘しているところである。（岩波書店　二八〇円）

（寺尾　誠）

経済学関係文献目録

（昭和三十三年一月刊）

理論・学説史・経済思想

＊再生産と恐怖　I・A・トラハテンベルグ著　飯田貫一訳　B6　二六九頁　二九〇円（青木書店）

＊剰余価値学説史　1　資本論第四部　K・マルクス著　長谷部文雄訳　B6　六一二頁　八〇〇円（青木書店）

＊資本蓄積論　J・ロビンソン著　杉山清訳　A5　四八五頁　九〇〇円（みすず書房）

＊現代資本主義　マルクス経済学　長洲一二編　B6　二九四頁（大月書店）

＊マルクス経済学体系　上　方法論・原理論〈宇野弘蔵先生還暦記念論文集〉宇野弘蔵・玉城章・末永茂喜・鈴木鴻一郎編　A5　三八三頁　八〇〇円（岩波書店）

＊マルクス経済学体系　下　段階論・現状分析〈宇野弘蔵先生還暦記念論文集〉宇野弘蔵・玉城章・末永茂喜・鈴木鴻一郎編　A5　五八六頁　一二〇〇円（岩波書店）

＊講座近代経済学批判　補巻　近代経済学批判論文集　岸本誠二郎・都留重人著　A5　二六一頁　三三〇円（東京経済新報社）

＊近世ヒューマニズムの経済思想〈京都大学総合経済研究所研究叢書　6〉出口勇蔵監修　A5　二六五頁　四三〇円（有斐閣）

＊経済学から歴史学へ　堀江英一著　A5　二一八頁　三三〇円（有斐閣）

＊平安遺文　9　竹内理三編　A5　四三一頁　七五〇円（東京堂）

＊新日本史のカギ　3　織豊政権から徳川幕府崩壊まで　中部日本新聞社編　B6　二〇一頁　二〇〇円（東京大学出版会）

＊鎌倉時代　下　京都　龍粛著　A5　三〇八頁　五五〇円（春秋社）

＊西アジア史・東西交通史　アジア史講座　6　田村実造・羽田明監修　A5　二一四頁　三六〇円（岩崎書店）

＊英国中世経済の発展過程　重藤威夫著　A5　三二六頁　五三〇円（酒井書店）

＊古代中世科学文化史　4　—第一四世紀前半—　G・サートン著　平田寛訳　A5　五三九頁　一二〇〇円（岩波書店）

統計

＊新らしい景気予測——経済統計の見方・使い方——稲葉秀三・向坂正男編　B6　二六五頁　三五〇円（日本評論新社）

＊統計の一般知識　中川友長著　B6　一七五頁　一八〇円（中央経済社）

＊賃銀統計教室　久米益雄著　B6　二一八頁　二二〇円（労働法令協会）

歴史

＊世界史大系　12　自由主義と国民主義　林健太郎編　B5　四〇二頁　一四〇〇円（誠文堂新光社）

＊明治維新の国際的環境　石井孝著　A5　七一一頁　一三〇〇円（吉川弘文館）

＊再生産と信用　高木暢哉著　A5　三九六頁　七〇〇円（有斐閣）

＊日本金融史　1　明治編　明石照男・鈴木憲久著　A5　三一三頁　六二〇円（東洋経済新報社）

財政・金融・保険・証券